
神様のいるところ

夏野ゲン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様のいるところ

【Nコード】

N8507Q

【作者名】

夏野ゲン

【あらすじ】

「いいところに行く」

お母さんにそう言われて、夜の山へ連れられていった幼い少女。夜道でお母さんの手を離してしまうと、いつの間にかお母さんの姿は見当たらなくなっていた。

1（前書き）

不定期更新になると思いますが、なんとなく連載物をば。
お気に召しましたら、感想、評価などよろしくお願いいたします。

最初に書いたやつから諸事情により大幅改編しました。

新しいおべべをもらった。

ぞうりも古くて底が薄くなっていたのを、新しくしてくれた。

「今日は何か特別な日なの？」ってお母さんに聞いたたら、
「そう。今日は特別な日よ」って笑ってた。

今日は特別な日なのか…。何の日だったっけ？誕生日はずっと先だったと思うけど。

「ねえお母さん。私、今日が何の日かわからないよ。なにが特別な日なのかなあ？」

「それはね、秘密よ。でも、大丈夫よ。すぐにわかるわ」

ひみつなのか…それじゃあ仕方ない。

でも、ひみつつていう言葉はなんだかわくわくする。

ひみつがひみつじゃなくなった時の「わっ」てする感じや、ひみつをひみつにしている時のドキドキ感はなんだか好きだ。

おかあさんもひみつ、好きなのかな？

月明かりの下、境内の裏のわき水で体を清める。

キンと冷たい水が、体だけじゃなく気持ちまでしゃんとさせる。

お母さんの言う「ひみつ」の答えはまだ分からないけど、夜におかあさんと出歩くななんて初めてだし、これだけでもこのひみつがごく特別なんだってわかる。

体を清めたら、新しいおべべをきて新しい草履を履く。
きれいな体に新しい着物なんて、なんだか不思議な気分。新しく生まれ変わったみたい。

お母さんに手をひかれて、神社に向かう石段を登る。

「手をつないで歩こうね。危ないから手を離してはいけないよ？」

おかあさんが優しく言う。わたしは強くうなずく。

「夜は化物の時間だから、山に入ってはいけないよ」

大人はみんなそう言ってるけど、今日はお母さんが手をつないでくれているから大丈夫。あったかい手。優しい手。そう。おかあさんが一緒なら、きっと大丈夫。

石段をさらに登る。ちょっと息が苦しくなつて汗が出てくる。

おかあさんをつないだ手がすこし汗ばむけど、でも約束したから手は離さない。

鳥居を抜ける。そして神社の社の裏手にまわり、その先のけもの道へと進んでいく。

私は、「あれっ？」と思う。前にへいちゃんたちとかくれんぼでこの先に入ろうとしたら、庄屋の家のおじいちゃんにこっぴどく怒られたのだ。「この先には絶対入っちゃいかんぞ！」って。

お母さん知ってるのかな？この先は庄屋さんが入っちゃいけないって言ってたんだよ？

「ねえ、お母さん……」

「大丈夫。心配しなくて大丈夫よ」

お母さんがそう言うんだから、大丈夫、だよね…？
そつおもうけど、不安がどんどん大きくなる。

「ねえ、どこに行くの？」

「…いいところよ」

それは、どこ？

「ねえ、ここつて入っちゃいけないところだよ？ 庄屋のおじいちゃん
が言ってたよ？ ねえ、お母さん。大丈夫なの？」

「…大丈夫よ。かやがいい子にしていれば」

暗くて何度も転びそうになりながら、けもの道を進んだ。
ざわざわと大きく森の草木がざわめく。なんだが、怖い。
思わずお母さんの手を強く握りしめてしまう。そうしたらお母さん
は優しく握り返してくれた。「大丈夫」っていうみたいに。

その瞬間、だった。

強い風が吹いた。

どうしようもなく強い風。

わたしは思わず目を覆い、おかあさんの手を離してしまう。
風がやんで目を開ける。ぐるりと見まわしてみるけど、お母さんの
姿も、掲げてきた提灯の明かりも、何も見えない。

「おかあさん！！どこっ！？」

大きな声で呼びかけるけど、答えは返ってこない。
きつと約束を破って手を離してしまったからだ…。
おかあさんがどこかに行っちゃった！！

泣きそうになるわたし。

でもここで、声がかけられる。

「さあ、こっちへおいで」
「？」

優しい女の人の声が聞こえた。
振り返った声の先には、ひとり分の影が立っていた。

「だれ？」
「だれでもないさ」

だれでもないって、どういうこと？

「こつちつてどこ？」
「いいところだよ」

おかあさんも言ってた。『いいところ』に行くんだって。

「おかあさんに、会いたい…」
「いいところに行けば、会えるかもね。」

…おかあさんにはいいところに行けばまた会えるの？
夜の闇の中取り残されたわたしは、どうすることもできずに、目の
前の人影のあとについていった。

暗いはずの夜道なのに、不思議に人影を見失うことは無かった。前を歩く人影は、わたしが後をついてくるといふ確信を持っているようで、こちらを振り返ったり、歩みを遅くして歩調を合わせてくれたりはしなかった。

進む道はけもの道から次第に整備された道へと変わり、最後には石畳の立派な道になっていた。裏の山にこんな場所があったの？この先にあるのがいいところ？

そんな風に思ったその時、空からはららと銀色のふわふわしたものが舞い落ちてきた。

「なにこれ…ゆき？」

わたしが空を見上げると、ふわふわと銀色のものがたくさん降ってくるのが見えた。

それは地面に落ちたり、木の葉のように目の前を通り過ぎていったり…。

そつと手を開いて落ちてくる銀色を手にする。ちよつとひんやりするけどゆきじゃない。

そんなふうにしたとき、手のひらの上の銀色が、きらきらと強い光を放った。

その光は強さをまして、空から降る銀色たちも、手のひらのそれと共鳴するように一斉に輝き始める。

「…なにっ!？」

わたしの問いかけに答えるものは何もなく、わたしは光の中に包まれた。

ゆめ、かもしれない。

ゆめ、じゃないかもしれない。

降り注ぐ銀色の光の中に包まれながら、わたしは誰かがみた何かを感じていた。

すごくつらい悲しみの声。

どこまでも深く沈んでいきそうな気持ち。

なにもかも奪われてしまったような喪失感。

痛み、悲しみ、憎しみ、そして何より、おかあさんに会いたいっ！！
そんな気持ち。

これは何？これはゆめ？

おかあさんに会いたいのわたしだけど、わたしじゃない気がする。
何もかも奪われたのは、わたし？それとも別の誰か？

わからない。これはゆめ？

…わからない。

目が覚めると、夢の中身は忘れてしまう。

忘れてしまうけど、楽しい夢には楽しい夢、悲しい夢には悲しい夢、怖い夢には怖い夢の印象が残る。

やっぱりわたしが見た夢の中身は思い出せない。だけど、わたしが見た夢は悲しくて、さみしくて、切ない夢だった。

ぼんやりした頭であたりを見回す。

わたしが気を失う前は、どこかよくわからない石畳の上を歩いていたはずだ。

でも、今私がいる場所は、畳は畳でも、石畳ではなく、きれいに手入れされた上等な畳が8畳分張られた、立派な部屋だった。

部屋の真ん中には小さな机が置いてあり、あたりは不思議な銀色の灯りで、ぼんやりと照らされている。

そして、ようやくわたしを見ている誰かの存在に気がつく。

「だれ？」

わたしの問いかけに、誰も答えない。

見られていることは間違いない。でも、わたしを見ている誰かの正体には気が付けない。

「だれ？」

もう一度問いかけるけど答えは無い。

誰もいない部屋。

誰も見えない部屋。

それなのに間違いなく誰かがわたしを見ている。

怖いと感じる場面なのかもしれない。

でも、不思議と怖くは感じられなかった。むしろ安心してしまっような、そんな不思議な感じ。

この感じは、何？

時間の流れも何も分からない、誰かの気配だけが感じられる部屋の中。

そんな部屋の静寂が突然に終わりを告げた。

がたんつ。

急に大きな音を立てて戸が開かれ、誰かが入ってきた。

「こんにちは。おじょうちゃん」

「…こんにちは」

中に入ってきたのは、きれいな女の人だった。こちらに見せる笑顔は朗らかな感じがして、いかにも元気な印象を与えられる。

「あの、わたし、いいところにいけばおかあさんに会えるって聞いてきたんですけど、ここがいいところですか？」

わたしが尋ねると、女の方は笑顔のまま首をかしげる。

「ここがいいところだってのは間違いないことだがね。おかあさんつてのは知らないね。あんた。そんなものはここにはないよ。いや、違うな。ここだけじゃない。あんたのおかあさんなんてのは、どこにもいない」

「えっ？」

女の方が何を言っているのかわからない。

「あんたには今、何もないんだよ。なにをもっていない。試しに自分の名前、言ってみな」

「えっ？」

わたしはもう10歳になる。自分の名前を言ってみるなんて、バカにしているんだろうか。

「イツ……」

自分の名前を言おうと思った。

でも、なぜか自分の名前を言うことができない。自分の名前を言おうとすると、頭の芯から熱くなって、口の周りがしびれるように痛くなって、声にならない。

「あっう……」

そして、頭の熱がすうっと冷めて、口の痛みがおさまったところには、今の今まで言えそうだった自分の名前が、完全にわからなくなってしまうていた。

…なんで？どうして？怖い！

目の前ではきれいな女の人が、笑顔のままわたしを見下ろしている。

「ほらね。言った通りだ。あんたにはもう、自分の名前すらない」

わたしは呆然としたまま、目の前の女の人を見つめていた。

「まあまあどうしたい？オジヨウちゃん？」

目の前の女の人は笑顔を浮かべた。

その笑顔、最初はきれいだと思ったけど、今はきれいすぎて怖いと思う。

「お名前がわからなくて悲しいかい？それは仕方のないことだよ。おじょうちゃんには名前なんて無かったんだから。仕方のないことだよ」

「名前、ない？」

「そう。もうここに来たら名前なんてないのさ。名前なんていらない」

「だって、じゃあ、名前が無かったら誰が誰かわからない…」

「わからないも何も、ここにいるのはみんなおんなじものさ。みんなおんなじで、みんな仲間だ。だから名前なんていらない。区別なんていらないのさ」

「わからないよ…」

「わからないことあるもんさ。みんなおんなじなんだ。あんたも私も。みんなおんなじなら、いらないだろう？名前なんて。おじょうちゃん。あんたはわたし、わたしはあんた。ほら。もう名前なんて

「いない」

（…そうなのかな？名前なんていないのかな？）

「それじゃあ、あたしはあんたのゴハンを持ってくるよ。この部屋から逃げようなんて思っちゃいけないよ。逃げようたって逃げられはしないんだけどね」

くくくつ…と目の前の女の人は笑う。

「まあ、逃げようとしたときには、今度はあんたの声でももらおうか？あんたのかわいらしい声でも、ね？」

思わず喉のあたりを押さえる私を見て、彼女はまた、ククク…と笑う。

「ふふ、怖いかい？怖かったら大人しくここで待っていることだね」

…パタン。

戸の閉じる音と、彼女が遠ざかっていく音が聞こえて、わたしはようやく体の力を抜いた。

わたしはここがどこなのか、なんとなくわかってきていた。ここは山姥の家だ。

わたしの住んでいた里の裏山には、山姥が住んでいるから夜に山に入ってはいけないんだ。

でも夜に山に入ってしまった。

お母さんは大丈夫だって言っていたけど、山姥は大丈夫だって思わなかった。

怒ってしまった。夜は神様やアヤカシの時間。そんな時間に山に入り込んできたわたしたちを許してはくれなかったんだ…。

わたしはどうなってしまっただろう？

食べられちゃうのかな？お家、帰りたいな。

…おかあさんとお父さんに会いたいな。

今からでも謝れば許してもらえるだろうか？

夜中に入ってきてゴメンなさい。お家に返して下さいって言えば返してもらえるだろうか？

…でも、あの人は言っていた。

きれいだけど恐ろしい目をしたあの人は言っていた。

「おまえにはお母さんなんていない」って。

お母さん、いるのに。お母さんがいなかったらわたし、生まれてな

いよ？

お母さんがいなかったら、お家に帰りたいなんて思わないよ？

でも、でもね…こんなに会いたいの、帰りたいのに、なんでだろう、思い出せないよお母さんの顔。よく思い出せない。

里の友達も、名前も顔も思い出せない。

手を繋いでくれているのは、間違いなくお母さんの手なのに、なのに顔が思い出せない…。

どうして、どうしてかな？おかしいな？
思い出せないよ…。

ねえ…わたしにお母さんなんて…いたの？

「痛いっ!!」

夢を見るようにどんどんと悪い方向に向かっていたわたしを、指先に走る痛みが止めてくれた。

「血っ!!」

薬指からとくとくと流れ出てくる血。ずきずきと痛む指先。
…わたし、今、何を考えてた？

「目、覚めた？」

「…誰？」

声の主を探すけど見当たらない。

「ココ、ココ、ここだよ」

「…どこ？」

足元を見て、ようやく見つける。

「ネズミ!？」

「うん。ボクはネズミだ」

少年のような声をだすネズミ。

「痛かったよね？ゴメン。かんだのボクなんだ」

「えっ？」

「君、今日この家に連れられてきた子だろう？」

「…うん」

「君、さっき怖い女と会話しただろう？」

「…うん」

「アイツは魔女なんだ。この館の主に雇われている怖い魔女」

「魔女…」

「そう。魔女さ。あの魔女はね、魔法で君の大事なものを奪っていった。君、なまえとられただろう？」

「なまえ、とられた？」

「そう。君、自分の名前わからなくなっちゃっただろう？それはとられちゃったのさ。あの魔女に」

「…どうして？どうして名前とっちゃうの？」

「ねえ、君、君の名前って結構大切なものなんだ」

「？」

「君の名前は、君のお父さんやお母さんが考えてつけた、君が君であるための『あかし』みたいなものだ。名前が無いと君は君でいられない。わかる？名前は君を君にしてくれるんだよ？」

「…よくわからない」

「うん。そうだよ。わからないか…」

「…うん。ゴメンナサイ」

「いや、謝る必要はないよ。ボクの説明が悪いだけ。ゴメンね」

「…」

「あのね。君の名前は大事なもので、そう簡単に奪うことはできないんだ。名前は君そのもの。君そのものを奪うことは力のあるあの魔女でも難しい」

「でも、今とられたって…」

「君が口に出そうとしてしまったから、とられちゃった。名前は声に出さない限り奪えない」

「でも、わたし、自分の名前言えなかった…」

「きつと、出した時の声ごと取られちゃったんだよ。あの魔女は強引だから…」

「ねえ…名前が無いとわたしはわたしじゃないの？」

「うん…残念がらね。いま、君は君じゃない」

「でも、わたしはわたしだよ?」

「君がそう思っていて、君は君じゃないんだよ。少なくともこの屋敷の中に、昔の君はもういない」

…わたしはもういない?

わたしがいない。だからおかあさんもいないし、おとうさんもいない?

よくわからないよ…怖いよ。

「でも、君が君でいられる方法があるよ」

「…わたしがわたしでいられる方法?」

「そう、君が君でいられる方法。君を君にさせてくれているもの。おかあさんとお父さんがくれた名前の他に何かがある?」

「わたしをわたしにさせてくれるもの?」

「難しいかな?」

わたしは首を縦に振る。

「それはね。記憶だよ。記憶…難しいかな?思い出つていえばわかる?」

「…思い出」

思い出。思い出。

友達と遊んだ思い出、おかあさんと手をつないでいったお祭り。お父さんのお手伝いをした畑…。

思い出。

「そう。思い出。君がいた記憶の積み重ね…君のたくさんの記憶が、君を君にしてくれる」

「でも…!!」

そう思い出が欠けている。

顔が思い出せない。今のわたしの記憶の中の人たちは、みんな顔がない…顔がない。わからない。

「忘却の魔法がかかっているんだ」

「ボウキヤク？」

「忘れちゃう魔法さ。いろんなことをね。楽しかったことも、悲しかったことも、つらかったことも全部まとめて消しちゃう魔法。あの魔法の得意な魔法」

「でも、わたし、まだ覚えてる。お母さんのこともお父さんのことも」

「ちよつとずつ奪っていくのさ。君の思い出を。そして思い出がなくなるたびに君は君でなくなる」

「なんで、なんでそんなことするの？」

「…君を食べるため」

「やっぱり、食べられちゃうの？ここはやっぱり山姥のお家なの？」

「ちょっと違う…でも少し似ているよ」

「よく、わかんない？」

「うん、実はボクもよくわかってない」

困ったように足元のネズミは頭をかく。

「…ねえ？」

「なに？」

「わたし、お家に帰りたいよ…帰れないのかなあ？やっぱり食べられちゃうの？」

「帰りたいよね。やっぱり。うん。そう言うと思ってたんだよね」

「…帰れるの？」

「すぐに帰れるかはわからないけど、君がしばらく食べられない方法ならあるよ」

「本当！？」

「本当。ほら、これ見て」

ネズミはお腹から器用に銀色の塊を取り出した。
銀色のきらきらした塊…この色、どこかで見たことがある。

「これ…この屋敷に連れてこられる前にみた」

「うん。そう。これは君の思い出を吸ったものだよ。あの魔女が作った魔法の結晶さ。あの時降ってきた銀色に触れると、思い出がこの銀色に吸い取られちゃう。名前と同じで思い出も奪うのは大変なんだ。名前と同じで、思い出も『君自身』だから」

「…そうなんだ」

「だから、この銀色に吸い取る。どんな仕組みかはよくわからないけれど、でも確かにその銀色は思い出を吸い取っていく」

「うん」

「思い出を吸い取ってしまった後は、その銀色は思い出が他の誰かに取られてしまわないように守ってくれる」

「うん」

「だから、その銀色を、君の思い出を失わなければ、きっと君は大丈夫。君が君を全部失ってしまわない限り、館の主は君を食べることはできないから」

「…うん」

「君がここに来た時、あの魔女が銀色をばらまいただろう？」

「そうだったね…きれいだった」

「君の記憶がとられた時、魔女があらかた君の記憶を持ち去ってしまった。でも、君が大事そうに抱えていたこの記憶には気がつかなかったみたい。君が連れ去られる時に、この銀色は地面に落ちてしまったけど、魔女が気がつく前にボクが拾っておいた」

「…ありがとう」

「いやいや、どういたしまして」

目の前のネズミは器用に頭を下げる。

「でも…」

「うん？」

「でも、どうしてあなたはわたしにいろいろ教えてくれるの？助けてくれるの？」

「…よくわからない。でも、助けたいんだよ。君のこと。なんとなくだけど」

そういったネズミはなんとなく笑っているように見えた。

「ねえ、ネズミさん」

「うん？」

首をかしげるネズミの仕草はどこか愛らしい。

「ネズミさんにお名前はないの？」

「…名前、ね。名前、わかんないんだ。ボクも名前とられちゃったの。あの魔女に」

「ネズミさんも？」

「そう。ボクも、そしてこの屋敷の外から来たものは、みんなそうしてあの魔女に自分をとられちゃうんだ。そして次第に自分じゃなくなってしまうって、館の主に食べられたり、この屋敷の一部になっ

てしまったり、あの魔女の人形みたいになってしまう」

「…怖いね」

わたしは背筋が寒くなるのを感じていた。

さっき感じていた、わたしがわたしでなくなってしまうような感覚。あのままあの感覚に飲みこまれてしまったら、わたしもそんな風になってしまうのだろうか？

「うん。怖い」

「でも…」

わたしはおかしなことに気がついていた。

「ネズミさんは、名前もとられてしまったのに、食べられたり、お人形みたいになったりしないで、ずっとネズミさんのままでいるんだよね？どうして、かな？」

「ああ、うん。気がついちゃった？君は賢いなあ。うん。ボクはね、名前は取られちゃったけど、実は思い出は今もすっかり持ってるんだ。だからボクはボクのままでいられる。ボクには名前は無いけれど、この思い出がある限り、ボクはボクのままでいられる」

ネズミさんは愛おしそうに自分の胸に手を当てた。

大切なものをじっくりじっくり思い返すように。

「ねえ、ネズミさん？」

「うん？」

「ネズミさんも外の世界からやってきたんだよね？」

「…うん。そうだよ」

「やっぱり、帰りたいよね？」

さっきのネズミさんの様子を見ていて思ったんだ。
ネズミさん、きっと自分の思い出の世界に帰りたいんじゃないかって。

「そうだね…帰りたい。それは帰りたいよ」

「じゃあ、一緒に帰ろうよ！…きつと帰れるよ！…ネズミさんのこと、きつとおかあさんも、お父さんもまってるよ？一緒に帰ろう？」

「…いいね。いい考えだ」

「そうでしょう？」

わたしは得意になって笑った。

帰ろう。きつと帰れる。一緒に帰ろう。

「でもね…きつとボクは帰れない」

ネズミさんはひどく悲しそうな声で言った。

「…どうして？」

「だって、ボクの体は…もう館の主に食べられてしまったから」

胸の中に冷たくて重い水が流れ込んでくるような感じがした。

「…えっ？」

よくわからない。ネズミさんの言っていることがよくわからない。

「ボクの体、食べられちゃったんだよ。この館の主に。もうずいぶん昔の話だよ。どれだけ昔の話かもわかんないくらい」

「…どういうこと？」

「ボクはもとは人間だったんだ。ちょうど君と同じ年ぐらいの。そして、今の君と同じようにこの屋敷に迷い込んで名前をとられちゃった」

ネズミさんが、人間だった？

「名前とはられちゃったけど、ボクは記憶を…思い出を失わなかった。…うんと、違うな。ボクは思い出を失くしたくなかった。だから、何回も何回も記憶を思い返して、忘れないように、失くさないように、そうやって自分が自分だってことを忘れないように頑張った」

自分が自分だってことを忘れないように…。

「ボクは頑張って忘れなかった。そしたら、あの短気な魔女がしびれを切らした。あの魔女は、あの銀色に思い出を移して記憶を奪うだけ、ボクの体から思い出を奪うなら、別にあの銀色に移さなかったっていいんだ」

銀色に移さなくてもいい？

「魔女が記憶を銀色に移すのは、そのほうが記憶を管理しやすいから。記憶を他のものに移すなら、あの銀色を使うより、生き物を使う方が簡単だ」

その先が、怖い。

「だから、あの魔女はこの屋敷のネズミを捕まえて、そいつから銀色で記憶を奪った。そしてからっぽになってしまったネズミに、ボクの記憶を移し替えた。生き物から生き物に記憶を移すのは簡単な魔法だったみたい。ボクの記憶はもとの体をあつさり飛び出して、からっぽのネズミの中におさまった…それが今のボク」

からっぽのネズミの中に少年の思い出。それが今のネズミさん。

「まあ、その後魔女はボクを捕まえて閉じ込めておくつもりだったみたいけど、思いつきり噛んでにげちゃった。うん。あとは魔女もボクを探すのをあきらめたみたい。お目当ての体は手に入ったから、体の中身の行方なんて、あの魔女にはどうでもいいのかもしれないね…」

「…なんで」

「…うん？」

「なんで、そんな風に言えるの？」

体、なくなっちゃったんだよ？なんでそんな風に平然としていられるの？

「勘違いしないでほしいんだけど、ボクは別に今の状態を不満に思っていないんだ。ネズミの体だろうが、ボクはボクだ。だから、悲しいことなんて無いよ。家に帰る体がないのは悲しいけれど、でも無いものは仕方がない」

「…うん」

「だから、そんな風に泣かないで。君にはまだ思い出も、体もある。名前さえ取り戻せば帰れるよ。ボクも協力するから」

「…うん!」

「いい返事」

最後の声には少しからかうような雰囲気を感じられた。

うん。きつと帰れる。そんな気がする。

こんなふうに見えるのも、みんな目の前のネズミさんのおかげだ。だから…こういうときには言わなきゃいけない…ううん、言いたい言葉がある。

「ありがとう。ネズミさん」

少し間をおいて、ネズミさんが答える。

「…まあ、いいってことですよ」

照れたようなその物言いに、ちょっとだけ笑ってしまった。

…トントントン。

足音が近づいてきて、わたしたちの会話は中断させられる。

「魔女の手下だ…魔女の手下が来る」

「えっ？」

「この足音、あの魔女の手下の足音だよ。きっと君の食事を持ってきたんだ。もう行かないと…」

少し焦った様子のネズミさん。

「いいかい、君。魔女の食事はすごくおいしそうで、実際おいしい。だけど、食べるときは気をつけるんだ」

「…えっ？」

「魔女の食事の中には、細かく砕いたさっきの銀色、記憶を奪う魔法のキラキラが入ってる料理があるんだ。それは汁物だったり、色の濃い食べ物の中や、あんの中に入っていたりする。だから、そういう食べ物には手をつけないほうがいい。記憶がとられてしまう。幸い魔女が直接食べているところを確認するなんてことはないから、

怪しい食べ物、その隙間、ボクが入ってきたところに流して捨ててしまおうといい。銀色に入ったものだけ手をつけていないと怪しまれてしまうから。わかったね？」

…トントントン。

ネズミさんが話す間にも、足音はどんどん大きく、近くなっている。

わたしが急いでコクコクとうなずくを見て、ネズミさんは部屋の角にある小さな穴の中に姿を消した。

…ガラリ。

そして、ネズミさんが消えて間もなく戸が開き、私は思わず、びくつと身をすくませた。

中に入ってきたのは、やっぱりさっきの魔女のようにきれいな人だった。だけど…

（この人…なんだか怖い）

部屋の中に入ってきてても、その表情はピクリとも動かないし、顔色も真っ白で、まるで、まるで人形のような人だった。

（名前と、思い出をとられちゃった、魔女の人形…）

ネズミさんの言葉を思い出してぞつとする。

きつと、きつとこの人が、ネズミさんの言っていた魔女の人形だ…。

こんなふうに、なっちゃうの？…嫌だよ。

「夕食の時間です。おあがりください。食べ終わりましたら、戸の外においでください。厠はこの部屋の隣にございます。厠を使う以外にこの部屋からはでないようにしてください。したがっていただけない場合には大切なお客様といえど、強硬的な手段をとらせていただく場合があります」

能面のような白い顔から、棒読みで告げられる言葉。ただ静かに動いている時よりも、その感情のこもらない声を聞いている時の方が、はるかに怖かった。

私が頷くのをみて、魔女の手下とネズミさんが呼んでいた人は、大きなお膳を置いて、この部屋からでていった。

彼女が出ていってからしばらくしても、私は怖くて食事をとることができなかった。

名前と思い出をとられてしまった私の末路を想像すると、怖くて震えが止まらなかった。

ネズミさんの教えてくれたことに従って、不思議にキラキラ光るおいしそうなあんかけや、普段食べることのできない、おもちの浮かんだぜんざいを、ネズミさんが消えていった穴に流し込んだ。

怖い魔女の作る食事をとることは怖かったけど、魔女の料理はどれもあまりにいいにおいで、そのうえずっと何も食べていなかったせいでお腹もすいていたから、怖さより食べたい気持ちが勝っていた。

真っ白なご飯。

お頭のついた大きなお魚。
新鮮な青物のお浸し。

怪しい料理を捨てても、普段食べているのよりもずっと立派なゴハンで、私はこれでもかと口の中に詰め込んで…そして少し気持ちが悪くなった。

お腹がいつぱいになったら眠くなってしまふ。
しかし、その眠気はあまりに唐突にやってきた。

(…なんだろう？すごく、眠い。ふわふわする。変な感じ)

薬でも入っていたのだろうか。急に襲ってきた眠気は目を開けていることが困難なほど強力だった。

(…何か、おかしい。すごく変な感じがする。なんだか…すごくさみしいよ？なに？これ)

もう、今感じている気持なのか、それとも誰かほかの気持ちなのかわからなくなっ、いろいろなものが私の中でごちゃごちゃになる。

(お母さん！！)

最後に強くそう思って、私の意識は途切れた。

これは…また夢の世界？

私は林の中を走り回っている。

顔が黒く塗りつぶされた誰か。

でも雰囲気で私…うつん、違う。「ボク」に向かって笑いかけているってわかる。

やさしい。すごくやさしい。この人はきっと…ボクのお母さん。

ボクは、小川でザリガニを釣って遊んで、一番大きいのが釣れたと思った。

そしたら、顔がつぶれたボクの友達が、「俺の方が大きいぞ!!」って。

それでケンカになって、取っ組み合いになって、水の中に頭から突っ込んで…。

顔をあげたら小川に顔が映ってる。

その顔は友達みたいに顔がつぶれていない。

ああそうか。これが、ボクの…うつん「私」の今の顔だ。

はっとして目が覚める。どれだけ眠っていたのだろうか？ひよっとして眠っていなかったのかもしれない。お膳に残されたお椀は、まだほのかに温かい

不思議な、でも穏やかな夢だったと思う。夢の中に出てきた人は、みんな顔はわからなかったけど、優しそうで、ボク…じゃない。私もすごく楽しそうだった

それなのに、それなのに、今見た夢が終わってから、怖くて寒気が止まらない。

何だろう。ここにきてから、私、おかしいよ…。

思い出してみたら、夢に見た景色は今まで見た景色によく似ていたように思う。だけど、その景色のどれもが、私の記憶にある集落とどこか違う。

そして何より、夢に出てきた顔の見えない人たちや、最後に水面に顔が映った私…違う！「ボク」にも心当たりがない。

何だろう…。もやもやする。吐き気がしそうで気持ちが悪い。自分の中に自分じゃないものが押し込まれているみたい…。なんだろう、これ？

…トトトトトト。

夢からさめないうちに響いてきた足音に、無理やり意識をはっきりさせられる。

響いてきたその足音は、これまで聞いてきたどの足音とも違ってい

て、子供の足音のように軽くて元気だ。

がたんっ！！

そして、合図も何もなく、私の部屋の扉は強引に開かれる。

これまでは魔女にしても、魔女の人形にしてもみんな合図をして入ってきていた。だから、突然開かれた扉の音は私を驚かせるには十分な力を持っていた。

「えっ！？」

私は困惑する。

扉を開けた誰か。それは、魔女でも、生気のない魔女の使いでもなく、私と同じ年ぐらいの元気そうな男の子だった。

そして何より、その男の子は、さっきまで見ていた夢の中で、小川に映った顔と瓜二つだったのだから。

「遊べ」

目の前に立つ男の子の言葉。

「わらわと遊べ」

おかしな一人称、そして高圧的に告げられる言葉。

そして強引に私の腕をつかむ。腕を捕まえたときにピリツとする。まるで静電気のような変な感覚。

「ダメだよ！！私、ここから出ちゃいけないって言われてるんだ」

私は精いっぱい拒絶の言葉を告げる。魔女も、魔女の使いもどちらも怖かった。

だけどこの子からは、その二人とは全然違う、異質な怖さを感じられた。

この子は、見た目は子供だけれど、全然子供に感じられない。まるで、子供の体の中に、得体のしれない何かを押し込んだような不気味さがあるのだ。

「この屋敷にいる以上、誰の言であっても、わらわの意向一つで簡単に覆る」

そう言って不敵に笑う男の子の目つき、顔つきは、やはり少年の

ものではなかった。

「わらわはこの屋敷の主にして、この世界の神なるぞ。何人もわらわの言に逆らうことなどできはせんのだ。さあ、わらわと遊べ。わらわに従え!!」

館の主？

この子が、館の主？

それじゃあこの子が…ネズミさんの体を食べた人？

顔が恐怖にひきつりそうになる。

「従わなければ食べられる」

館の主を名乗る少年の見た目からは、そんなことは想像できない。だけど、彼の目は私の本能に、食べられてしまうという得体のしれない恐怖を植え付けるのに十分なほど鋭く、とても人間の持つ視線とは思えなかった。

私の首は縦に動く。

そうしなければ、今ここで私が頭ごと食べられてしまう…そんな気がして。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8507q/>

神様のいるところ

2011年5月10日01時16分発行